



## 老舗商店街に新風

高島平駅を出ると目の前が高島平団地。1階に店が並ぶ棟が、いくつか連なっているのが見えた。「団地には商店街が6つ。戸数は1万を超えるからね。高齢化しても37年間、品ぞろえの多さは変わらないよ」と中央商店街の鈴木友一会長。米、野菜、鮮魚、総菜の店を中心に市場さらがらの活気をみせる。

団地の先にはけやき並木。赤塚公園

熱帯環境植物館 03 (5920) 1131★フィッシュジャパン (3935) 1365★パセリ (3975) 2220  
★ガトーマスター (5922) 5412★にりん草 (3975) 2189★カフェ・タブロー (3559) 2101★フ  
ットレスト (5398) 6665★ポワソンルージュ (5399) 3336★てんからてん (3559) 3218

の緑も目に染みる。街中の樹木が大きくみずみずしい。「以前は一面『赤塚たんぼ』と呼ばれる水田でした」と公園

公園近くに一昨年、パン店を開いた下条幸美子さんは「パセリのように鏡に新たな彩りを添えたい」。団地の上に夕焼け空が広がっていた。(武居智子)

*Journal of Health Politics, Policy and Law*, Vol. 35, No. 4, December 2010  
DOI 10.1215/03616878-35-4 © 2010 by The University of Chicago

そのころ、東京では高島平団地が誕生した。地下鉄ですぐに山手線に出られる交通至便のアーモス団地として大人気となり、しかし一時は自殺の名所と呼ばれ、大友克洋の名作まんが「童夢」のモデルだとか、いや違つとか言われた。四十代以上の人には、半端な観光地よりもずっと有名だし、団地育ちの私にとっては、ある意味、聖地のように思ふ場所もある。

初夏の夕方から、高島平を歩いてみた。実はここを歩くのは

私は小学三年生から三年間、大阪の千里ニュータウンに住んだ。当時、極度に画一的な団地の景観はとてもカッコよかつたし、画一的であるがゆえの、奇妙な体験も好きだった。

どの棟も瓜二つというか、瓜全部だから、ちょっと気を抜いて歩くと、自分の家を間違えるのだ。家に帰ったはずなのに、自分の家ではない。「え?」と狐につままれたような、異次元空間に迷い込んだような、不思議に豊かな気分になる。

A black and white halftone portrait of Wang Kang, showing him from the chest up, wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt.

## 夜に浮かぶ白い聖地



白い明かりに照らし出された高島平の団地群＝板橋区高島平の「お山の広場」で（鎌山華次撮影）

初めてだ。一三三区内どいと  
も、都営地下鉄三田線の果てに驚いた。まるで神域のように、  
あり、近くにほかに鉄道は通つ木々が高く豊かに茂っている。  
ていないので、なにかの折にぶこれが地下鉄に並行して、終点  
らり立ち寄ることもないし、住の西高島平駅まで延々三駅以上  
民以外を呼び込む施設や名所もも続く。そして、高島平駅から  
特にならから、訪れる機会がま緑地帯を越えて団地に入ると、  
るでない。物理的には近いが、商店街も熟成され、思いのほか  
心理的に非常に遠い、異境だ。いい風情ではないか。  
地下鉄が地上に出て高島平地 商店街を抜けて「お山の広

天井に照り返した螢光灯の光  
が、寒にやわらかく浮かび上が  
らせていく。昔のエレベーター  
の力がを思わせる、しつとりと  
した氣品が漂う。

場に立つと、すくなくともほ  
い気分になる。十数階建ての団地に囲まれながら、思わず、作中の超能力老人チョウさんのように、ベンチでうつむいてギリギリと目を剥きだくなる。暮れなむ街の音が、団地の団壁に反射して響く。音がグルグル回るよのにも感じられる。不思議な響きをチヨウさん気取りで楽しまむかたじ、日が暮れた。

高島平の夜はとても白い。共用部分の照明はほぼすべて、白い電球灯や水銀灯で、団地の上から下まで、白い灯が無数に点る。白い光が照らす白い団地。その画一感がいい。咲き誂るシリツメクサの白い照り返しが、高島平の夜に似合っている。

由に巨蟹たちを仰ぎ見ると、四半世紀以上前に設置されたといつ飛び降り自殺防止フェンスのシルエットを、外廊下の壁や

◆次回は、ニコライ堂（千代田区）です◆